



TITLE:

京大広報 No. 343

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 343. 京大広報 1987, 343: 395-402

ISSUE DATE:

1987-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209336>

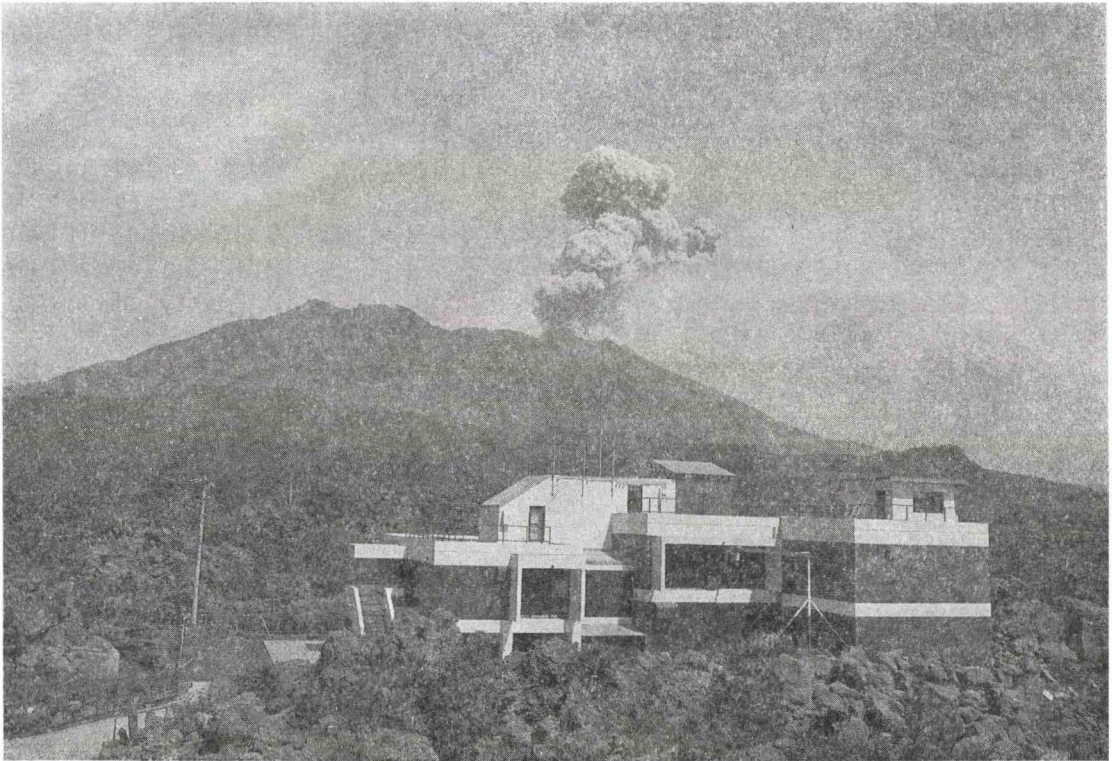
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 343

京都大学広報委員会



防災研究所・桜島火山観測所本館

—関連記事本文 399 ページ—

目 次

| | |
|------------------------------------|-----|
| 部局長の交替等…………… | 396 |
| 年末年始の火災予防と特別防火演習…………… | 396 |
| 昭和63年度共通第1次学力試験…………… | 396 |
| 昭和62年度京都大学市民講座「学問と美」 講演要旨Ⅱ…………… | 396 |
| 動物実験指針検討委員会の発足…………… | 398 |
| 外国人学者・留学生懇親会…………… | 399 |
| ＜紹介＞ 防災研究所・桜島火山観測所…………… | 399 |

| | |
|--|-----|
| ＜資料＞ 昭和61年度歳入・歳出決算額及び 予備的経費配分実績…………… | 400 |
| 計 報…………… | 401 |
| 日 誌…………… | 401 |
| ＜随想＞ 和歌山から 名誉教授 前川 暢夫…………… | 402 |

＜大学の動き＞

部 局 長 の 交 替 等

学生部長

寛田知義学生部長の後任として、河合隼雄^{はやお}教育学部教授（臨床心理学講座担当）が12月7日任命された。任期は昭和63年12月6日までである。

年末年始の火災予防と特別防火演習

本学教職員、学生等には、日頃から火災予防にご協力を願っているが、年末年始の火災多発期を控え、この機会に、一人一人が防火についての認識と理解をなお一層深めるようお願いしたい。また、消防署による夏期の立入検査の結果、ガス器具とガスゴム管との接続部の不備、消火器の未設置及び未更新、廊下等避難経路上の支障物、喫煙管理が不十分である等種々の不備事項を是正するよう指示されている。これらの是正指示事項に留意し、防火管理の強化及び消防用設備の点検等早急に改善されるようお願いする。

学内の火災事故に備えて、自衛消防団が置かれているが、恒例の自衛消防団年末特別防火演習を、今年は12月24日（木）午後1時30分より実施する。当日は法学部、経済学部、文学部、教育学部の協力により法学部経済学部本館の2階から出火したものと想定し、通報、連絡、初期消火、避難、誘導、救出、物品搬出等一連の総合訓練を行い、自衛消防団の消防車のほか、左京消防署か

らも数台の消防車が出動して、消火訓練等を行う。宇治地区では12月3日（木）に実施済みであり、病院地区では12月21日（月）に実施予定である。

（経理部）

昭和63年度共通第1次学力試験

昭和63年度共通第1次学力試験は、昭和63年1月23日と24日の両日に実施される。

このため本学では1月22日（金）及び23日（土）の授業が休止される。

本学に協力する大学は、昨年度と同様に京都府立医科大学である。

試験の概要は、次のとおりである。

日時と教科

| | |
|----------|------------------|
| 1月23日（土） | 国 語（13：00～14：40） |
| | 理 科（15：30～16：30） |
| 1月24日（日） | 数 学（10：00～11：40） |
| | 外国語（13：00～14：40） |
| | 社 会（15：30～16：30） |

試験場と志願者数

| | |
|-------------|--------|
| 北部構内試験場 | 1,570人 |
| 教養部構内試験場 | 2,738 |
| 本部構内試験場 | 3,242 |
| 南部構内試験場 | 774 |
| （医学部・薬学部構内） | |
| 京都府立医科大学試験場 | 372 |
| 合計 | 8,696 |

昭和62年度京都大学市民講座「学問と美」

講演要旨Ⅱ

教 養 と 美

教育学部教授 岡 田 渥 美

歴史上おそらくは最も潑刺とした「教養」の理念を抱いていたのは、かのゲーテをはじめとする新人文主義の人々であったと云えよう。人間が、より大きな異質の世界へと身を投じることによって、自己の内なる向上への意欲と外なる諸々の制約や運命とが激しく切り結ぶ中で、あたかも植物が陽光と氷雪の真只中で逞しく美しく成育してゆくのと同じ様に、長期にわたる試練を通じてこそ、真の人間性が自己の内なる精神の大地に根を張り、天に向かって梢を伸ばし、枝を茂げらせ花をつけ、やがて円熟した実を結ぶに至る——このようなダイナミックな形成的プロセスこそが、すな

わちゲーテやヘルダーやフンボルトらにとっての「教養」だったのである。それゆえ、このような全人格的教養への努力ないし人間性陶冶の道程には、実現さるべき自己と世界についてのより高い理想が、いつも生き生きとイメージされていたであろう。と同時に、そこには憧憬と幻滅、希望と失意、獲得と喪失が反覆的に伴っており、したがって、不断の自己超克へと立ち向う不屈の意志と緊張がつねに存在していたはずである。

それに引きかえ、今日の教養はどうであろうか。生き生きとした、より豊かな人間性の充実を目指してやまぬ人間精神の向上的・形成的な努力とその成果という実質は、今やことごとく逸失され、ただ干からびた無力の訓詁学的知識の集積といった意味合いしか感じとれなくなっている。このような「教養」の凋落は、本質的には人間理想の昏迷と深い関わりをもっており、現代のあらゆる先進工業諸国に共通にみられる現象である。

われわれ現代人の危機の本質は、一言でいえば、人格的主体としての人間の空洞化にあると云えよう。産業革命いらい、人間存在における目的と手段との主客顛倒是ますます顕著となり、今日の（核融合技術、延命・人工受精技術、情報ニュー・メディア、バイオ・テクノロジーなど）いわゆる高度先端科学技術の革新下では、その深刻さは極点にまで高まりつつあると云ってよい。B・ラッセルが現代を評して、「手段においては巧妙だが、目的においては愚蒙」と語ったのも、正に「目的自体としての人間主体」に関する価値感覚の喪失を指すのである。このような本質的危機の中にあって、われわれ現代人は自らの「教養」について、「人間であること」「人間として生きること」の意味と目的との直接的関わりにおいて、もっと真剣に、もっと徹底的に追求してみることが肝要であろう。

そこで、この問題を改めて自覚的に問い直すようすがとして、敢えて「教養と美」をテーマに選び、思想史上に名高い人々の教養観と美に関する思想を取り挙げてみた。すなわち、(1)その根底に人間の高貴さへの憧れを宿し、「真実の人間」「本来の人間」への飽くなき志向に裏打ちされたニーチェの教養批判、(2)「自然」こそ「善美」であり、完全な人間性の徴標であり、したがって真正の「教養」理念に他ならぬものと捉えたルソー独自の逆説的自然主義的教育論、(3)人間の基本的な力としての理性と感性とが相互に協力し制約し合って、ともに調和・融合しているが如き全人的状態を「美」と呼び、その「仮象」としての美、すなわち人間性の完全な理念の象徴としての美を通じての全体的・調和的人格の育成を唱えたツラーの「美的教育」の理論、そして(4)「われわれ自身の全体的完成の追求」活動こそ「人生の批評」としての「教養」に他ならぬと説き、しかもその目標を人間存在における「善美にして光なるもの」と捉えたM・アーノルドの教養論を順次に検討し、それらを手掛りに「教養」と「美」の関係について論考した。その詳しい内容については、紙幅の関係上省略せざるを得ないが、簡単には次のように纏めうるであろう。すなわち「美」は、人間を生根の根源的可能性へと引き戻す第1の機能によって、「教養」がそもそもそこから生い立ってくる根元ないし基盤そのものを拡大し豊富にし深化せしめる。それと共に、美はさらに第2の機能によって教養の質を引き上げ、教養の内容・実質を醇化し、高尚ならしめ、洗練せしめるのである。

しかし、以上の論議に「結論」なぞ固よりあり得ようはずもない。そこから何を掬すべきかは、われわれ一人一人の問題に帰するであろう。「人間存在」とは何であり、人間存在にとって「教養」とは何なのか、そして「人間が真に人間らしく在ること」と「美」はどのように関わるのか——こうした問いは、ほんらい主体的に問われねば無意味であり、自らの「生き方」そのものに関わる課題として、むしろ実存的にこそ行ぜられるべき問いであろう。(11月7日)

極微の美しさ

—原子・分子を視る—

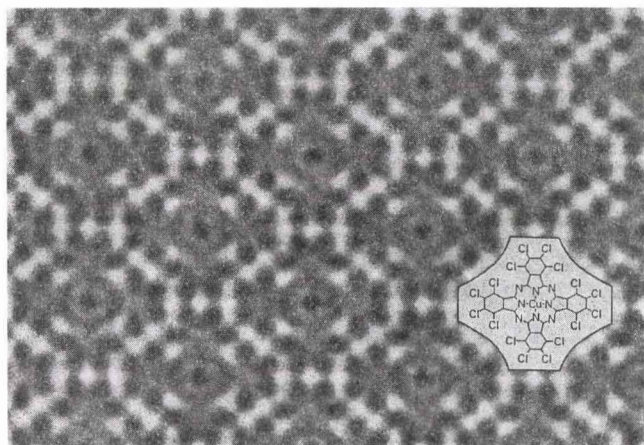
化学研究所教授 植田 夏^{なつ}

古代ギリシャのデモクリトスが、物質を限り無く分割して行くと、最小不可分のアトムに到達するとしたのは、観念的とは云えこの世の真理を見事に示唆していた。一般に結晶が成長するとき、あるいは小さくへき開する場合に、常に一定の晶癖を採る現象も、18世紀頃には形状の揃った微小粒子の周期配列で説明する試みがなされている。この理念を推進すれば「原子」の本質に迫る筈であったが、人はむしろ単位粒子の三次元的な周期配列の様式分類に走り、多様な原子配列の対称性について、系統的な知識を確立した。

原子が90種余りある元素の最小単位として、また分子は元素の組合わせで構成されるマテリアルの最小単位として、その存在を疑う人はいない。これらの概念は結晶よりむしろ気体の化学反応を起点に、化学者や物理学者が多年のあいだ限り無く多くの推論と実証を繰返し、いわば手探りで到達した帰結であった。

これほどまでに普遍的となった原子も、その直径が1億分の1～3cmと云う極微の粒子であることが推定されて以来、実に最近まで“目で見て確かめる”試みをほとんど誰もが放棄してきた。顕微鏡も能力に限界があり、特に近接した二物体がそれを照らす光源の波長の半分以上に近付き過ぎると、いかに像を拡大しても識別は不可能である。原子の径やその間隔は、光の波長の1000分の1程度であり、新しい光源の出現とレンズの存在が、原子観察には必要不可欠の条件であった。

1920年代ドブroyの物質波の仮説の実証として電子線の波動性が発見されたとき、電子顕微鏡の発明と原子像観察の可能性が示唆された。電子の波長は原子の径より遥かに短くできるからである。この予言の実現までには半世紀近い歳月が必



化学研究所に設置されている500キロボルト超高分解能電子顕微鏡で撮影された塩化フタロシアニン銅の分子像。構成原子の像が明瞭に識別されている。

要であった。しかしこの間にも年ごとに進歩する電子顕微鏡で結晶を観察する科学者によって、原子や分子の周期配列を暗示し、また逆に周期性を乱す諸現象に起因する抽象絵画にも似た美しい映像が次々に発表された。

電子顕微鏡像で細部を明瞭に再現するには、原子で散乱する電子波を情報の伝達者として、可能

な限りレンズに多数取り込んで干渉させる必要がある。この考えに基づき、われわれが市販の装置を用いて初めて分子の像を観察したのは1970年頃のことである。しかしその構成原子まで見るためには、波長を一段と短くする必要があると認められた。この実現のために1974年京大宇治キャンパスに超高電圧電子顕微鏡が設置されたが、塩化フタロシアニン銅と云う緑色顔料の結晶について、原子による規則正しい分子構成の有様を、同年代の終りには撮影することができた。これは人類が原子の存在を視覚的に確認した最初であるとともに、新しい対象へ視野を広げ得たことを意味する。

このような極限的手法で観察される物質は結晶が多く、そこでは分子や原子の周期配列の映像が美しい。その相互配置が前に見られた対称要素を満たしているのは見事である。自然の規制の下に最も安定した状態を保持すべく採られた揺るぎの無い配置が、通常理念を越えた画像構成の源となり、われわれの美意識を励起するのである。

(11月7日)

動物実験指針検討委員会の発足

動物実験指針検討委員会が9月30日に発足した。

この委員会は、動物実験の取扱いに関して本学としてその在り方について検討するため、昨年6月、部局長会議の承認を得て設置された「実験動物の取扱いに関する懇談会」の報告をふまえて、7月14日に開催された部局長会議において審議された結果、「本学における適切な動物実験の実施について調査検討を行い、必要な指針を策定する」(委員会要項第二)ことを目的とし、その設置及び委員会要項が承認されたものである。

9月30日の会合では、総長から委員会の設置に至る経緯、趣旨説明等が行われた後、委員長に入谷明委員が選出された。ついで、委員長から委員長代行に山田淳三委員が指名され、委員会の運営、審議の進め方、指針の内容等について討議が行われた。

委員会要項(資料1)、委員名簿(資料2)は以下に掲載する。

(資料1)

京都大学動物実験指針検討委員会要項

- 第1 京都大学に動物実験指針検討委員会(以下「委員会」という。)を置く。
- 第2 委員会は、京都大学における適切な動物実験の実施について調査検討を行い、必要な指針を策定する。
- 第3 委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
 - (1) 実験動物を取り扱う部局の教授、助教授又は講師 若干名
 - (2) その他総長が必要と認める教授、助教授又は講師 若干名
- 2 前項の委員は、総長が委嘱する。
- 第4 委員会に委員長を置き、委員の互選によつて定める。
 - 2 委員長は、委員会を招集し、議長となる。
 - 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員が、その職務を代行する。
- 第5 委員会に必要に応じて小委員会を置くことができる。
 - 2 小委員会には、必要に応じて第3第1項の委員以外の者を、その委員として加えることができる。
 - 3 前項の規定により小委員会に加えられる委員は、総長が委嘱する。

4 前3項に規定するもののほか、小委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

第6 委員会に関する事務は、庶務部庶務課において処理する。

第7 この要項に定めるもののほか、委員会の議事の運営その他必要な事項は、委員会が定める。

附 則

この要項は、昭和62年7月14日から実施する。

(資料2)

委員名簿

(◎委員長, ○委員長代行)

| | | | |
|---|---|------|----------|
| 文 | 学 | 部 教授 | 平 野 俊 二 |
| 法 | 学 | 部 教授 | 錦 織 成 史 |
| 理 | 学 | 部 教授 | 米 田 満 樹 |
| 医 | 学 | 部 教授 | ○山 田 淳 三 |
| 薬 | 学 | 部 教授 | 佐 藤 公 道 |
| 農 | 学 | 部 教授 | ◎入 谷 明 |

医学部附属病院教授 本田 孔 士
人文科学研究所教授 山 田 慶 児
結核胸部疾患研究所教授 竹 田 俊 男
食糧科学研究所助教授 廣 瀬 正 明
ウイルス研究所教授 石 本 秋 稔
原子炉実験所教授 上 野 陽 里
霊長類研究所教授 久保田 競
医用高分子研究センター 教授 清 水 慶 彦

外国人学者・留学生懇親会

恒例の外国人学者・留学生懇親会が12月9日(水)午後6時から京都グランドホテルで開催され、外国人学者、留学生、教職員、招待者約900名が出席した。

懇親会は、最初に、西島安則総長の挨拶があり、河合隼雄学生部長の発声による乾杯で始まった。中国、インドネシア、タイの舞踊や各国の歌が披露され、午後8時すぎ閉会した。

<紹介>

防災研究所・桜島火山観測所

—火山噴火予知の研究—

桜島火山観測所の設立経緯や桜島火山とそれまでの活動経過については、第1次火山噴火予知計画(昭49~53)による観測所新館の竣工を機会に、本広報№165(1978. 10. 15)で紹介した。その後、火山噴火予知計画は第2次5か年計画を経て第3次計画の最終年度を迎え、目下第4次計画(昭64~68)を立案中である。

防災研究所における火山の研究は、附属桜島火山観測所の設立当時から火山爆発予知の研究に重点がおかれた。昭和30年秋の桜島南岳山頂の爆発的噴火が設立の契機となったが、山頂噴火はその後も継続し、昭和49年には年間500回に及ぶ爆発的噴火が発生し、噴石、降灰、土石流などの火山災害が多発した。この一連の火山活動は、わが国の火山噴火予知の研究計画を推進する動機ともなった。

当観測所では、第1次計画(昭49~53)において目前で繰り返す山頂噴火活動に対処するため、桜島島内の観測態勢を整備した。島内8観測点に地震計等を配置し、NTT専用回線あるいは専用無線のデータ伝送を採用し、震源決定等のリアルタイムデータ処理を行う観測装置(中域火山観測

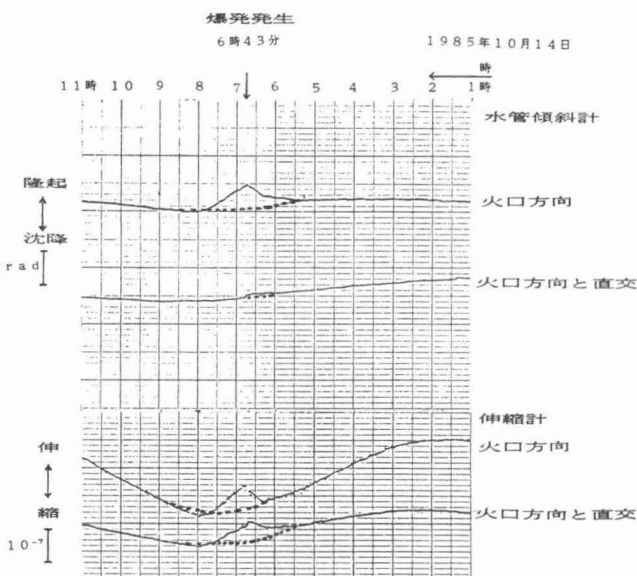
網)を導入した。また、九州地区移動観測班(助手1・技官1増)が新設され離島火山の研究・調査を実施することになった。なお、本館は拡充され海岸近くの立地条件の良い場所に新築された。

第2次計画(昭54~58)では、溶岩を流出する山腹噴火を対象に、大正大噴火活動の経過からみて南九州の地震活動に注目し、地震計等8点を加久藤、始良、阿多カルデラを取り囲むように配置した広域火山観測網(助手1増)を設置した。また、地殻変動の連続観測として従来行ってきた潮位観測を島の東・西・南・北域とカルデラの縁にあたる鹿児島港に増強し、テレメータシステムによるリアルタイム観測を採用している。

第3次計画(昭59~63)では、島内の観測環境を改善し、活動火口に近づきSN比の高い精密観測により噴火の前兆現象を把握することを目的とした。そのため、観測坑道(水管傾斜計・伸縮計・地震計)やボーリング孔(地中地震計・傾斜計・温度計)を設けた。また、火山観測のデータ処理の基礎的研究として、爆発的噴火の警報システム、火山活動判定のための火山性地震高速自動判別処理システムを開発している。なお、第1次から第3次計画の間に移動観測班の設備強化が図られ、地震・測地・重力・熱・有線無線テレメータ等の測定装置が備わった。

以上の様に観測態勢が整備され、得られた研究

成果の一部を紹介する。(1)始良カルデラを含む広域の地殻変動と火山活動との関係；隆起量からマグマの供給量が年間約1千万立方メートルと一定であり，山腹噴火による流出溶岩量とそれまでの隆起量の関係から大活動の長期予測が可能な事を示した。(2)山頂噴火活動に先立って発生する深い火山性地震(A型)の震源分布が明らかとなり，マグマの上昇経路を示唆している。また，浅い火山性地震(B型)の発生規模は一連の山頂噴火の放出エネルギーに比例している。これらのことから山頂噴火活動の短期予測がなされている。(3)南九州の深発地震の発生状況が把握出来るようになり，マグマの発生源についての資料が得られるようになった。(4)山頂の爆発的噴火の直前予測；活動火口下へのマグマの貫入あるいはマグマ内でのガス成分の分離により，山体内部圧が増加して山頂部が膨張する。この現象に伴う傾斜・伸縮の変化について膨張速度と積算量を逐次計測し，経験的に決めた基準値との比較により，活動形態(噴火準備・噴火中・兆候なし)と警告のレベル(警報・臨界状態・注意)を判定させている。噴出物量の多い爆発的噴火についてはほぼ100%，その他の噴火活動も含めると60～70%的中率である。最近は火山性地震の発生状況の資料との組合せで，さらに的中率の向上を図っている。なお，火山災害軽減に関する研究として，溶岩流や噴出物(火山弾・れき等)の到達範囲のシミュレーションによるゾーン・マップの作成にも着手



爆発の前兆記録例。6時43分に爆発が発生しているが約1時間前から傾斜計は山頂方向の隆起を，また伸縮計は山体の膨張を示している。点線は爆発がない場合に予想される変動で，ゆっくりした変動は主に海水の干満の荷重による変動である。

している。

鹿児島では，県主催の「鹿児島国際火山会議」が「火山と人との共存」のテーマで昭和63年7月19～23日に開催される。サブテーマ「火山を知る」，「火山と生きる」，「火山を活かす」の3分科会で，火山研究者，防災関係行政官，市民及び報道関係者が一体となって話し合い，火山と共存して生きて行く道を探ろうとする国際会議である。恒常的火山活動を続ける桜島の膝元で開かれることに意義があり，桜島火山観測所に期待される所が大きい。

(防災研究所)

<資 料>

昭和61年度歳入・歳出決算額及び予備的経費配分実績

昭和61年度歳入・歳出決算額

(文部省所管国立学校特別会計)

| 区 分 | 昭和61年度決算額 | 昭和60年度決算額 | 差引増△減額 | 増△減率 |
|-------------------|----------------|----------------|---------------|--------|
| 歳 入 | 円 | 円 | 円 | % |
| 附 属 病 院 収 入 | 12,962,601,164 | 12,190,822,867 | 771,778,297 | 6.33 |
| 授 業 料 及 入 学 検 定 料 | 4,507,646,050 | 3,837,985,000 | 669,661,050 | 17.45 |
| 学 校 財 産 処 分 収 入 | 124,000,000 | 0 | 124,000,000 | — |
| 雑 収 入 | 2,298,104,554 | 2,332,772,278 | △ 34,667,724 | △ 1.49 |
| 合 計 | 19,892,351,768 | 18,361,580,145 | 1,530,771,623 | 8.34 |

| 区 分 | 昭和61年度決算額 | 昭和60年度決算額 | 差引増△減額 | 増△減率 |
|-------------|----------------|----------------|---------------|--------|
| 歳 出 | 円 | 円 | 円 | % |
| 国 立 学 校 | 37,165,405,604 | 35,663,508,928 | 1,501,896,676 | 4.21 |
| 人 件 費 | 24,612,710,745 | 23,656,736,923 | 955,973,822 | 4.04 |
| 物 件 費 | 12,552,694,859 | 12,006,772,005 | 545,922,854 | 4.55 |
| 大 学 附 属 病 院 | 15,599,750,225 | 14,876,113,519 | 723,636,706 | 4.86 |
| 人 件 費 | 6,603,531,251 | 6,344,723,621 | 258,807,630 | 4.08 |
| 物 件 費 | 8,996,218,974 | 8,531,389,898 | 464,829,076 | 5.45 |
| 研 究 所 | 10,569,689,510 | 10,348,967,032 | 220,722,478 | 2.13 |
| 人 件 費 | 6,404,608,369 | 6,165,592,439 | 239,015,930 | 3.88 |
| 物 件 費 | 4,165,081,141 | 4,183,374,593 | △ 18,293,452 | △ 0.44 |
| 施 設 整 備 費 | | | | |
| 物 件 費 | 6,756,468,000 | 6,498,333,498 | 258,134,502 | 3.97 |
| 合 計 | 70,091,313,339 | 67,386,922,977 | 2,704,390,362 | 4.01 |
| 人 件 費 | 37,620,850,365 | 36,167,052,983 | 1,453,797,382 | 4.02 |
| 物 件 費 | 32,470,462,974 | 31,219,869,994 | 1,250,592,980 | 4.01 |

昭和61年度 予備の経費配分実績

(職員旅費)

| 区 分 | 金 額 | 区 分 | 金 額 |
|------------------|----------|-------------------|---------|
| 1. 予 算 額 | 17,368千円 | (2) 特 別 事 業 旅 費 | 1,244千円 |
| 2. 部局長会議決定による配分額 | 17,368 | (3) 入 学 試 験 経 費 | 1,271 |
| (1) 会 議 出 席 旅 費 | 0 | (4) 各 部 局 へ の 補 足 | 14,853 |

(校 費)

| 区 分 | 金 額 | 区 分 | 金 額 |
|-------------------|-----------|---------------------|---------|
| 1. 予 算 額 | 235,830千円 | 課 外 活 動 施 設 等 整 備 | 1,670千円 |
| 2. 部局長会議決定による配分額 | 235,830 | 課 外 活 動 費 | 5,950 |
| (1) 継 年 的 補 足 経 費 | 41,656 | 学 生 懇 話 室 紀 要 刊 行 費 | 500 |
| (2) 教 育 研 究 経 費 | 64,909 | 厚 生 補 導 設 備 整 備 | 6,700 |
| 教育研究用図書整備 | 1,110 | (4) 入 学 試 験 経 費 | 31,423 |
| 教育研究用設備費 | 12,886 | (5) 本 部 運 営 費 | 16,750 |
| 教育研究用事業費 | 50,913 | (6) 管 理 運 営 費 | 64,672 |
| (3) 厚 生 補 導 費 | 16,420 | 庁 舎 等 管 理 運 営 費 | 19,662 |
| 学 生 寮 整 備 | 1,600 | 施 設 等 整 備 | 45,010 |

計 報

西村一男（文学部事務官）

12月5日逝去、61歳。昭和41年文学部勤務。61年永年勤続者表彰（20年勤続）を受ける。

日 誌

(1987年11月1日～11月30日)

11月2日 フランス共和国 Strasbourg 第2大学
Etienne Trocmé 学長ほか2名来学、総長及
び関係教官と懇談
9日 発明審議委員会
14日 名誉教授懇談会
24日 評議会

26日 学位授与式
27日 マレーシア Malaysia 国民大学 Abdul Ha-
mid Bin Abdul Rahman 副学長, Malaysia
工科大学 Ainnuddin Bin Abdul Wahid 副
学長及び Malaysia 農科大学 Nayan Bin
Ariffin 副学長来学、総長及び関係教官と懇談

